

平成 30 年 6 月 12 日現在

機関番号：24402

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2016～2017

課題番号：16K13210

研究課題名(和文) ディスポゼッションと複雑性の理論に基づくヴァイマル共和国時代の群集表象の再検討

研究課題名(英文) Reconsideration of the representation of the masses in the Weimar Republic from the stand points of the philosophy of dispossession and the theory of swarm intelligence

研究代表者

海老根 剛 (Ebine, Takeshi)

大阪市立大学・大学院文学研究科・准教授

研究者番号：00419673

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,000,000円

研究成果の概要(和文)：本研究のテーマは、2000年以降に二つの学問領域で急速に発展してきた集団や群れのふるまいに関する理論的知見(人々の共同行動についての政治哲学と群れのふるまいに関する自然科学的研究)にもとづいて、ヴァイマル共和国時代の群集表象の成立と展開を再検討することである。本研究はそれらの新たな知見が20世紀の群集をめぐる思考の理論的枠組をラディカルに組み換えるものであることを明確にし、それらがヴァイマル共和国時代の群集表象の新たな角度からの分析に生産的に寄与し得ることを明らかにした。

研究成果の概要(英文)：The Focus of this research is to reexamine the process of formation and reconfiguration of the representation of the masses in the Weimar Republic from the vantage points of the newly developed theoretical thinking both in the political philosophy of "action in concert" and in the scientific research of the "swarm intelligence." This research shows that these new bodies of knowledge mark the radical departure from the theoretical paradigm of the thinking on the masses in the 20th century and can bring new productive insights into the characteristics and peculiarities of the representation of the masses in the Weimar Republic.

研究分野：人文学

キーワード：群集 群れ ドイツ文学 表象文化論 言説史 共同行動

1. 研究開始当初の背景

本研究の背景は、とりわけ 2000 年以降に二つの学問領域で集団や群れのふるまいをめぐる学問的言説が台頭し、それらの知見が影響力を持つようになったことである。

ひとつは、とりわけユーロ危機後に世界各地の大都市で展開した新しいタイプの集団的政治行動(例:オキュパイ・ウォールストリート運動)であり、それに呼応して登場したデモや集会といった人々の共同行動を考察する政治哲学的理論である。

もうひとつは、自然科学の分野、とりわけ動物行動学において発展してきた群れのふるまいをめぐる研究である。この研究は 1990 年代にコンピューターによるシミュレーションを導入することで飛躍的に発展したが、そこで提出された「群知能」の概念は 2000 年代に入ると人文社会科学の領域の研究にも影響を及ぼすようになっていた。

これら二つの領域で発展してきた、相互にかなり異なる学問的文脈に属する研究は、いずれもいくつかの決定的な点で、20 世紀に支配的であった群集をめぐる思考の枠組みを組み換えている。それらの研究は、20 世紀の政治的・文化的思考において群集と結びつけられてきた事象(例:革命、暴動、デモ、集会、大都市の雑踏、マスメディア)を新たな視点からとらえ直すことを可能にしている。本研究の問題意識は、こうした現状認識にもとづいて、群集表象の歴史研究に新たな理論的知見を導入することにあった。

2. 研究の目的

本研究課題をその一部とする申請者の研究の目的は、上述の通り、2000 年以降に現代思想および自然科学の分野において、それぞれ別個に急速な発展を遂げてきた集団や群れの行動に関する理論を、ドイツ・ヴァイマル共和国時代の群集表象の言説史的考察に導入することで、当時の群集をめぐる言説(群集論)を規定していた理論的枠組の特徴を明らかにするとともに、文学作品に描かれた群集の表象を新たな角度から考察することである。

20 世紀の政治的・文化的思考を規定していた理論的枠組からラディカルに切断した 21 世紀の理論的諸研究を参照することによって、ヴァイマル共和国時代の群集表象の歴史性と構築的性格が露になる。したがって、本研究では、当時の群集表象をラディカルに「脱自然化」して分析することが目指されることになる。同時にまた、同時代の理論的言説との関係においては、しばしば曖昧ないし両義的な性質を持つように思われる文学作品における群集の表象を、異なる仕方でも分析し評価することもまた、目指されることになる。

こうした研究全体の見取り図のもと、とりわけ本研究課題の 2 年間では、政治哲学における人々の共同行動に関する考察と群知能に関する自然科学の研究成果を概観し、それがヴァイマル共和国時代の群集をめぐる言説の分析に対していかなる寄与をなし得るのかを検証することに重点を置いた。

3. 研究の方法

本研究では言説史の方法論を採用するが、その際、(1) 研究対象となる時代と地域をヴァイマル共和国時代のドイツ、およびオーストリアに限定するとともに、(2) 文学作品のみならず、群集を対象とする学問的言説(哲学、心理学、社会学)をも考察の対象とする点に本研究の特徴がある。

研究対象とする時代と地域を限定するのは、そうすることでドイツ語の *Masse* という言葉に含まれる独特の意味論的広がりが群集をめぐる思考にいかなる影響を及ぼしているかをより精緻に分析できるからであり、また、イギリスやフランスとは異なり第一次世界大戦後に本格的な大都市文化の開花と大衆的な民主政への移行を経験したドイツ社会の歴史的文脈に即して、群集をめぐる言説を分析するためでもある。

対象とする言説を文学作品に限定せず、同時代の学問的言説をも扱うのは、領域横断的な分析を通して、群集をめぐる学問的言説と文学的实践との間の相互作用に注目した分析を行うためである。

4. 研究成果

本研究課題の二年間では、上述の通り、主に 2000 年以降に進展した人々の共同行動についての政治哲学的理論と群れのふるまいについての自然科学的研究の成果を概観し、それらの理論的研究によって提起された概念や理論的枠組がヴァイマル共和国時代の群集の言説を対象とする歴史研究にいかなる寄与をなし得るのかを検討した。公的に発表された具体的な成果としては 2 本の論文が挙げられるので、それらを中心に研究成果を記述する。

2017 年の論文「群集の行動とディスポゼッションの理論」では、とりわけ 2010 年代に世界各地の大都市で展開した集団的政治行動(スペインの M15 運動やエジプトやチュニジアの民主化運動、アメリカ合衆国のオキュパイ運動、トルコのタクシム・ゲジ公園における抗議行動など)に呼応して政治哲学の分野で形成された人々の共同的政治行動についての理論のうち、ジュディス・バトラーの仕事を取り上げている。そこでは、バトラーの考察がヴァイマル共和国時代の群集をめぐる言説の主要な論点を取り上げな

がらも、決定的な点でそれらの言説から一線を画し、新たな理論的観点を導入していることを指摘した。

ヴァイマル共和国時代の群集をめぐる言説は、ギュスターヴ・ル・ボンの群集心理学の影響下にあったが、同時に群集心理学が提出した命題をラディカルに読みかえる試みによっても特徴づけられていた。この読みかえの試みの焦点をなしていたのは、群集の主体としてのステータスであった。群集心理学は、群集の形成を諸個人が主体性を喪失するプロセスとして定義し、催眠術のモデルにしたがって操作の客体として群集を解釈したが、このとき前提されていたのは、主権的主体としての個人の概念であった。それに対して、ヴァイマル共和国時代の群集をめぐる言説は、しばしば、主権的主体の諸能力が個人に属するものであることを認めつつも、革命時に生起する陶酔的な群集体験のうちに、群集の主体化の契機を見出そうとした。つまり、支配的秩序に対する否定的意思によって諸個人が同質化し、集団的な主体が形成されるというのである。

こうした群集をめぐる思考とは対照的に、ジュディス・バトラーによる人々の共同行動の考察は、非主権的な主体として個人から出発する。誰もが主権的な主体性を剥奪されており、あらかじめ他者との相互依存的な関係性のなかにあること、したがって、また外部の権力による収奪にさらされてもいるということ。こうした二重の存在様態（剥奪＝収奪）を、バトラーは「ディスポゼッション」という概念を用いて考察している。集会やデモや蜂起といった人々の共同な政治行動は、諸個人の主体性の喪失ではなく、また集団的な主体性の獲得でもない。それは、諸個人の非主権的で関係的な存在様態に根ざした連帯であり、還元不可能な差異をはらんだ多数性による人民の意志の萌芽的な実演（enactment）である。こうした考察から帰結する洞察は、ヴァイマル共和国時代の群集をめぐる言説を規定していた理論的枠組の諸特徴を際立たせるとともに、当時の文学的な群集表象にはらまれる両義性を新たな角度から解釈することを可能にする。

2018年の論文「「大衆をほぐす」-シアトロクラシーと映画(館)」では、観客の大衆的嗜好の支配による美的規範の解体をデモクラシーにおける大衆の支配による規範的秩序の解体と結びつける「シアトロクラシー」の議論を、映画と映画の観客をめぐる議論に導入することで、大衆としての映画の観客の政治的ポテンシャルを考察している。その際、一方では、大衆民主主義における政治の美学化をめぐる議論を批判的に検討する政治哲学的議論（ユリアーネ・レーベンティッシュなど）を参照するとともに、1920年代、30年代に映画の観客としての大衆が持つ政治的ポテンシャルを考察したヴァルター・ベンヤミンの群集（大衆）をめぐる考察を、当

時の群集をめぐる議論の文脈とも関係づけながら分析した。

ベンヤミンはブレヒトの叙事演劇を論じたエッセイや複製技術論文において、大衆としての観客を論じている。とりわけ、批判版全集の表記における複製技術論文の第三稿では、異質な諸個人からなる大衆としての観客から階級意識に目覚めた革命的階級が生成するプロセスが論じられている。そこでベンヤミンは、心理的凝集性（同質化）によって特徴づけられる群集心理学的な群集とは異なり、革命的群集としてのプロレタリアートは、凝集性が「ほぐれた」状態にあると指摘する。つまり、同質性が解体された、差異からなる集団性として群集が定義されるのである。こうした群集の概念化は、同時代の群集をめぐる支配的言説と比較したとき、きわめて独創的である。

本論文では、こうしたベンヤミンの考察をミリアム・ハンセンによる映画観客の理論的考察と比較するとともに、今日の政治哲学の観点も導入することで、映画観客の持つ政治的ポテンシャルについて考察した。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕(計 2 件)

海老根剛、「「大衆をほぐす」-シアトロクラシーと映画(館)」、『a+a 美学研究』、査読有、12号、2018年、56-71頁。

海老根剛、「群集の行動とディスポゼッションの理論 -ヴァイマル共和国時代の群集表象の批判的再検討にむけて-」、『表現文化』、査読有、10号、2017年、41-65頁。

〔学会発表〕(計 1 件)

Takeshi Ebine, “Die Auflockerung der Masse” – *Theatrokratie und Kino*, Symposium “Theatrocracy: The Aesthetic and Politics of the Spectator”, 2017.

〔図書〕(計 0 件)

〔産業財産権〕

出願状況(計 0 件)

名称：
発明者：
権利者：

種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

取得状況（計 0 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

6．研究組織

(1)研究代表者

海老根 剛（Ebine, Takeshi）
大阪市立大学文学研究科・准教授
研究者番号：00419673

(2)研究分担者

（ ）

研究者番号：

(3)連携研究者

（ ）

研究者番号：

(4)研究協力者

（ ）